

## カテゴリー

---

神経系, 歩行

## タイトル

---

パーキンソン病患者のすくみ足に対する経皮的脳刺激（症例報告）

Superficial brain stimulation to overcome freezing of gait in Parkinson disease [📄PubMed](#)

へ Nonnekes. J, Neurology. 2017 Mar 15.

## 内容

---

### なぜこの論文を読もうと思ったのか？

- ・パーキンソン病のすくみ足に対し、なにか有効な治療はないかと考えていたため。
- ・患者本人がみつけたすくみ足の対処法が記載されており、有益だと感じたため。

### 背景・目的

- ・すくみ足は脳基底核の障害により生じる。
- ・脳基底核は動作の自動化と開始を担う組織であり、その機能の欠落はなにかしらの代償的な外部刺激がないと動作を開始できないことを意味する（リズム形成、視覚刺激など）。
- ・パーキンソン病患者はそれぞれ独自の代償的外部刺激を使って日常生活を送っており、本研究ではそれらを紹介する。

## 症 例 紹 介

- ・ 65 歳
- ・ 20 年前からパーキンソン病の診断
- ・ 主症状はすくみ足で、一日に最低 1 回はすくみ足が生じる。
- ・ 服薬の効果が薄れるとすくみ足が高頻度に発生する。

## 結 果

3 つの代償的外部刺激

- ①患者自身の人差し指で左右のこめかみを押す
- ②アイススケートを行うつもりで歩く
- ③膝を高く持ち上げようとする。

上記 3 つの戦略がすくみ足を改善する理由の考察

- ・ ①：こめかみを押すことが経皮的に脳を刺激するため、もしくは体性感覚を刺激するためと記載されているが、明確な考察は述べられていない

・②③：本来、大脳基底核は習熟された動作（歩行など）の自動化と開始を担うものであり、慣れていない動作（スケート）などは基底核以外の経路で動作が開始されるため、有効なのではないかと述べられている。

・③：膝を高く上げることでより大きな身体重心の側方移動を生じるからだとも説明されている。

### 論文の背景や興味深かったこと

・症例報告という方法で新たな治療法を提案していることに面白さを感じた。研究のように、理論上概ねどの患者にでも当てはまるというものではもちろんないが、こういった一症例の報告から新しいアプローチや理論が作られることがあるのだと驚いた。

・②のアイススケートのような、慣れていない動作を意識することで基底核以外の経路を使うというのは論理的で、使える方法のように感じた。

### 私見・明日への臨床アイデア

---

・どれも日常生活に取り込みやすいものであり、効果があるか実際に患者に試してもらうことは価値があると思った。

・患者の生活に治療のヒントが隠されており、しっかり情報を拾っていきたいと思う。